

日本近世における不殺生思想

——雲棲株宏の受容と影響——

西 村 玲

一 はじめに

日本近世における仏教は、日本特有の寺檀制度によって全国津々浦々に広がり、十六世紀以後の東アジアにおいて、日本は仏教を宗教政策の中心におく唯一の国となった。近世後期にいたるまで、仏書は出版物の首位を占めていることから分かるように、近世社会における仏教の思想的影響は大きかった。江戸時代の仏教思想は、中国の明末仏教と深く関わりながら近世的変容を遂げてゆく。近世仏教の思想的特質は、寺檀制を基盤とする仏教の庶民化、いわゆる民衆仏教であるとされており、具体的には、当時の中国からの影響による三教（仏教・儒教・神道、中国では道教）一致を説くことがその一つである。

明末高僧であった雲棲株宏（一五三五～一六一五）は、十七世紀以後の中国仏教が庶民化していった思想的原点の一人とされる。本論では、株宏の大きな特徴の一つである不殺生思

想に着目する。株宏の思想が日本でどのように受容されていったかについて、株宏の思想を確認し、日本における株宏著作の出版状況を述べる。

二 雲棲株宏の不殺生思想

中国明代では宋代の風を受け継いで、儒教を中心とする三教（儒教・道教・仏教）合一の政策が取られた。明代中期の仏教抑圧政策によって、仏教はほとんど消滅せんばかりに沈滞したが、十六世紀になって陽明学が盛んになるにつれて、仏教も同じく心の学として見直され、明末には復活するに至った。その中心となった一人が雲棲株宏であり、三教合一を特徴とする明末新仏教の先駆けとされる。株宏は、念仏と戒律と禪を融合した穏和な宗風によって広い支持を得、現代に至るまでの中国社会で広く尊敬されている。十七世紀以後の東アジア思想史の特徴は、三教合一とその民衆性とされるが、株宏は仏教におけるその潮流を生み出した主要な一人である

と思われる。

東アジアの大乗仏教における不殺生の原理は、梵網經を根拠として、インド由来の六道輪廻説と中国における孝道が一体化したものである。⁽¹⁾ 梵網經で「六道の衆生は、皆これ我が父母なり。而も殺し而も食せば、即ち我が父母を殺し、亦た我が故身を殺すなり」として、すべての生物を殺すことを禁じ、その放生をすすめる。株宏は、いまだ俗人であった若年時から動物を祭祀の犠牲とすることを止め、生涯を通じて不殺生を実行して放生を行った。株宏が行う放生会は広く知られており、参加する知識人も多かった。

当時、カトリック・キリスト教の布教のために中国にやってきたイエズス会宣教師マテオ・リッチ（一五五二―一六一〇）は、仏者が主張する輪廻にもとづく不殺生は、迷信であって不合理であると批難する。これに対して株宏は、人も動物も同じ肉であり、動物の肉を食することは人の肉を食べることにも等しい、と主張した。なぜすべての生物が我が父母たりうるのか、という問いに対して、株宏は次のように答えている。

問う……如何が衆生は皆我が父母なるや。答う。儒・道は今世を談ずるに止まる。仏法は乃ち前身を論ず。受生は既に多生を歴て、託胎は必ず諸趣に徧し。六道の衆生は皆我父母なること、豈に然らざらんや。⁽³⁾

なぜならば、儒教や道教は現世のことを語るに止まるが、仏法は前世を論じるからである。すでに無限の過去世を生きている中で、我々は六道を巡ってきた。衆生は皆、我父母でないはずがあるうか、と。株宏にとって、三世と六道にもとづく不殺生の思想は、現世一生の閉塞から無限の過去世と未来世へ、人の現身から六道の多種多様な存在へと魂をひらく回路であった。⁽⁴⁾

株宏は、俗人に不殺生と善行を行うことをすすめるために、俗人向けの『自知録』と『戒殺放生文』の二著を著した。『自知録』は、株宏が七十歳（一六〇四・万曆三二）の時に書いたものである。道教から学んだ善悪星取形式（自らが行った善と悪の行為を毎日の終わりにカレンダーに点数で書き込み、善行の点数がたまっていくと世俗の願いがかなうとされる）の功過格である。善門と過門をあわせて全一八〇条ほどの箇条があげられて、浄土往生などについては世俗の善行の多寡に準じて報われるとする。『戒殺放生文』の著作年代は不明であるが、さまざまな故事をあげて俗人に殺生を禁じて肉食を戒め、積極的な善行として放生を勧める。これらは、不殺生をはじめとする善行を、庶民の生活に即した平易な形にするこ

とで広まった。放生は身近な善行となって一般化し、株宏が定めた放生会などの儀礼次第は、現在まで伝えられる儀礼の基礎となったとされる。⁽⁵⁾

中国で一六〇〇年前後から出版された株宏の著作は、ほぼ同時代に日本へ輸入されている。一六〇〇年代半ばから、その和刻本（中国書籍を日本で出版した本）が広く出版されるようになり、明治時代に至るまで多くの和解本（注釈書や翻訳など）が刊行された。

三 『自知録』 出版とその展開

近世前期における中国書籍の受容は、戦国時代が終わって平和になると同時に始まり、一六〇〇年代前半には明末に復興した新しい仏教や、朱子学・陽明学などの思想も輸入された。一六〇〇年代後半には、明朝滅亡に伴う隠元隆琦（一五九二～一六七三、一六五四年来日）や朱舜水（一六〇〇～一六八二）など、多くの中国知識人が日本へ渡来したことを契機として、和刻本の出版が本格化し、明末の文化と学問が近世社会に広まった。当時、通人の「黄檗好み」と言われたように、近世前期における中国文化の存在は大きかった。

株宏の『戒殺放生文』は、日本では隠元の二偈「勸放生」「勸戒殺」と跋を付して、一六六一（寛文元）年に出版された。『自知録』は、一七〇一（元禄十四）年に、浄土宗捨世僧の忍激（一六四五～一七二一）によって出版され、広く流布した。忍激は、鉄眼版の大蔵経を建仁寺の高麗大蔵経によって対校した学僧である。近世の戒律復興に大きな役割を果たした彼

は、法然研究により近世浄土宗学の端緒を拓いた。

その出版の経緯は、『自知録』にある忍激の跋にある。それによれば「かつて株宏の『自知録』を見ていたが、信ぜずには非ざれども、未だ行ずるに及ばなかった。後に明代の善書を読み、積徳立命の学のためには『自知録』を行わざるべからざることを知って、世に広めようとしたが、『積徳立命』の出典が分からないために、前々から親交があつた黄檗宗の独湛（一六二八～一七〇六、黄檗山第四代住持）を尋ねて質問した⁽⁶⁾という。独湛は、その出典である中国儒者である袁黄の功過格『陰騭録』と『自知録』を与えた。忍激は「細かに読んで喜びに堪えず、益々人間にこの二録、無かるべからざることを信ず」として、「病をおして訓点を打ち、資財を捨てて刊行した」という。忍激は、石清水八幡宮の神官と共に毎月放生会を行っており、亡くなる日にさえ自著の『石清水放生会記』に筆を入れて改訂している⁽⁷⁾。

忍激によって『自知録』が出版された直後に、和文で二七条を説明して図を入れた『作福図説』という本が出たようである⁽⁸⁾。それを元に、一七〇八（宝永五）年には『積善春草吟』⁽⁹⁾という仮名本が出版された。この著者は「湖東僧某」としか分からないが、跋文によれば、藕益智旭（一五九九～一六五五）にしたがって株宏を蓮社第八祖にしており、内容においても阿弥陀念仏が強調されることから、恐らくは浄土宗僧侶では

ないかと推測される。『積善春草吟』は、『自知録』をもとにして四五条を掲げているが、その内の『作福図説』から引いた二七条に和歌を付けている。不殺生について、『自知録』と『積善春草吟』の該当箇所をあげておく。

『自知録』…「仁慈篇」家畜の屠殺禁止・害獣の殺害禁止・宴会などでの肉食禁止・漁師・猟師の生業禁止など、「雑善篇」肉食を減ず・見聞疑の肉をやめる。

『積善春草吟』「第二十条」…鳥獸魚（とりけだものうを）などの命（いのち）をすくふ。大（おほい）なるものは一命を十善とす。ちいさきものは一命を一善とす。

『和歌』おろかなる 身はいかならん かりそめの 世としるだにも おしき命を

和歌の意は、「この世がかりそめのものと知っている人間の身であっても、自分の命は惜しいのに、それを知らない愚かな動物が死ぬ恐ろしさはどれほどのものだろうか」として、日本化の意義を示す。

一七〇〇年代後半になってからは、自知録を翻訳した『和字功過自知録』が刊行された⁽¹⁰⁾。それは俗人向けのものだからという理由で、『自知録』における仏教についての善行の章「三宝功德類」（造寺・造仏など）が省略される。現在確認されるだけでも、近世を通じて明治期に至るまでに六回刊行されており、⁽¹¹⁾かなりの程度に流布したことをうかがわせる。

四 おわりに

明末仏教と江戸仏教の関わりについて、東アジアにおける仏教民衆化の発端とされる明末の雲棲株宏の不殺生思想に着目して、その著作が日本でどのように受容されたか、近世仏書の出版状況から報告した。東アジア大乘仏教の不殺生思想は、梵網經を主たる根拠として、インド由来の六道輪廻と、中国社会で絶対視される孝の思想が一体化したものである。明末の新仏教を始めた高僧の一人であった雲棲株宏は、一般向けの善書である『戒殺放生文』と『自知録』によって不殺生を説き、仏教思想が民衆化する発端をひらいた。

中国で一六〇〇年前後に出版された株宏の著作は、一六〇〇年代半ばには日本でも出版された。浄土宗の捨世学僧であった忍濃は、『自知録』を出版するにあたって、黄檗宗の独湛に教示を求めて原本を得、放生を行った。忍濃の『自知録』出版直後から、関連の著作が出版されており、ほぼ同時代の『積善春草吟』ではすでに和歌にされて、日本化の努力が示されている。一七〇〇年代半ばには『自知録』和訳である『和字功過自知録』が出版されて、近世から近代にかけて少なくとも六回出版された。明末に仏教を復興した株宏の著作は、日本の近世社会に広く受け入れられ、確実に日本化していった。

- 1 道端良秀「放生思想と断肉食」、『中国仏教思想の研究』、平楽寺書店、一九七九年、二二八―二三〇頁。
- 2 『梵網經』下巻、大正藏經二四巻、一〇〇六頁中。
- 3 『梵網經心地品菩薩戒經義疏發隱』、新纂大日本続藏經三八巻、一九一頁。
- 4 西村玲「慧命の回路」、『宗教研究』三七四号、二〇一二年。
- 5 鎌田茂雄『中国の仏教儀礼』、大蔵出版、一九八六年、七一、一六一、三二八頁など。
- 6 『近世漢籍叢刊 蓮池大師遺稿外』、五二二―五二三頁。
- 7 『獅谷白蓮社忍澁和尚行業記』、浄土宗全書一八、四一頁下。
- 8 これは『積善春草吟』の記述による。田中実マルコス「黄檗独湛の『勸修作福念仏図説』について」（『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第三九号、二〇一一年）によれば、独湛は一七〇四（宝永元）年に黄檗山から株宏の著作を用いて、唱えた念仏を数えるための図版である「作福念仏図説」を刊行し、忍澁の法然院からも刊行された。近世を通じて多くの版を重ねて、異本も多く出されたという。この「作福図説」も関連書と思われる。
- 9 酒井忠夫「江戸中・後期日本における中国善書の流通」、『酒井忠夫著作集2 増補中国善書の研究 下』、国書刊行会、二〇〇〇年、三六〇―三九八頁。
- 10 八木意知男「和解本善書の研究」、『女子大國文』一三五号、二〇〇四年。
- 11 現時点で確認できるのは、①一七七六・安永五年、②一八〇〇・寛政十二年、③一八一四・文化十一年、④一八三八・天保九年、⑤一八三九・天保十年、⑥一八九〇・明治二十三年。

日本近世における不殺生思想（西村）

（本稿は、二〇一三年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）「インドの共生思想の総合的研究」〔課題番号：25244003〕の成果の一部である。）

〈キーワード〉 雲棲株宏、『自知録』、不殺生、忍澁、『積善春草吟』

（公益財団法人中村元東方研究所研究員）